北から南から

目指せ、犠牲者ゼロ！命を守る仁淀川流域治水プロジェクトへの挑戦！

高知県 伊野地区自主防災会連合会
高知県いの町総務課危機管理室

いの町は高知県の中央部に位置し、一級河川仁淀川の支川である宇治川流域は、上流に行くほど低くなる典型的な低奥型地形の内水河川で、毎年のように水害の被害を受けてきました。今後も気候変動の影響により洪水流量の増大が見込まれており、令和３年３月には千年に1度級の豪雨で仁淀川の堤防が決壊した場合、町中心部の宇治川流域では深さ５ｍ以上の水が押し寄せ、命の危険がある人が現状１万人近く存在するとの被害想定が公表されました。国はこれまでの治水対策からあらゆる関係者が流域全体で行う「流域治水」へと転換を図り、当町も仁淀川の氾濫など今までの想像を越える大規模水害から住民の生命を守るためには、地域防災の要である自主防災会との連携が不可欠であると考えました。

そういった中、同じく危機感を持った宇治川流域の伊野地区自主防災会連合会も「住民でやれることはやろう」と決意し、安全な緊急避難場所の確保や災害リスクの共有、防災意識の普及啓発を最優先に取り組む必要があるとして、連合会内で勉強会を開催するなど行動を開始しました。これまでの取組内容として、民間企業の意識調査、緊急避難が可能な高台や民間・公共施設の調査、各地区の想定浸水深の調査を行うなど、流域住民主導で活動が展開されています。また、同じ宇治川流域の枝川地区自主防災会連合会とも協力し同様の取組を行うなど、地域間での連携も強化されています。

そして現在、その活動が連合会に加盟する各自主防災会に展開され、地域住民の防災意識向上を目的に住民研修会を開催するなど、大規模水害から住民の生命を守るための取組が広がってきている状況です。

令和４年11月に宇治川流域の是友地区で開催された住民研修会では、４回に分けて開催したところ102名の参加がありました。住民研修会では、伊野地区自主防災会連合会の樋口義博会長から仁淀川流域治水プロジェクトの概要説明や地区内の浸水深の調査結果などが報告されました。そして、参加者アンケートでは、仁淀川氾濫に対する自分の家の浸水深に対する理解については「理解できた」94名（92.1%）、「どちらでもない」２名（２%）、「分からなかった」６名（5.9%）との回答があり、想定最大規模洪水に対する危機意識については「持つことができた」98名（96.1%）、「どちらでもない」３名（2.9%）、「できない」１名（1.0%）となり自主防災会の主体的な取組が流域住民の防災意識の向上を図る結果

となりました。また、避難訓練を実施する際の参加についても「参加する」89名（87.3%）「どちらでもない」４名（3.9%）、「参加できない」９名（8.8%）となり、避難訓練に対する意識の高さを実感しました。このような住民研修会を多くの地区で開催することで、流域住民の危機意識が向上し、命を守るために「いつ」「どこに」「どのように」逃げるのかを自らが考え主体的に行動する力を身につけることができると考えています。

伊野地区自主防災会連合会における住民研修会は始まったばかりではありますが、町としても、このような流域住民が主体となって行動することは、流域治水対策を含め防災活動を進めるうえで目指すべき取組であると認識しており、大変心強いと感じています。そして「安全に逃げる」対策がここまで進んだ要因は、決して行政主導とならず自主防災会を中心とした地域住民との連携があったからだと実感しています。

今後も自主防災会の主体的な取組を尊重し、役割を相互に補う協働という形で町も関わりながら、多くの流域住民が参画できる仕組みづくりや地域は地域で守る意識づくりを進め、大規模水害からの犠牲者ゼロを目指し課題に挑戦してまいります。

民間企業の意識調査の様子

緊急避難場所の調査の様子

想定浸水深の調査の様子

住民研修会の様子